

## ■ ドル/円は年明け後にトライアングル上放れの可能性…

前回更新分の本欄で、ポンド/ドルについて「暫く調整含みの展開が続く可能性」を想定したが、案の定、先週の週足ロウソクはかなり長めの陰線となり、ついに今週は一目均衡表の週足「雲」上限が位置する水準（1.2905ドル）まで下押し場面を垣間見ることとなった。

つまり、再び1.3000ドルを下回る水準まで下押ししてきたわけで、結局のところ先に行われた英総選挙の結果を受けた値上がり分は、もはやすべて剥げ落ちてしまった。

既知のとおり、先週19日にエリザベス女王が読み上げた『施政方針演説』に付随する「序文」において、ジョンソン英首相は「移動期間の2020年以降の延長は排除する」との方針を正式に表明した。これまでの原則では、英とEUとの合意があれば「2022年末までの延長」という選択肢もあったわけだが、今回、ジョンソン首相は「あえて退路を断つことでEU側にプレッシャーをかけることを意図した模様である。

むろん、それを受けたEU側が英国の好き勝手を簡単に許すはずもない。結局、今後も長らく市場は英国による「合意なき離脱」の可能性を警戒し続けなければならず、その間のポンドの上値は自ずと限られることになると見られる。

足下では、あらためて62週移動平均線が下向きになりはじめており、場合によっては同線が位置する1.2800ドル処から31週移動平均線が接近している1.2600ドル処の水準を試す可能性もあるものと思われる。

なお、当面はポンドが単純に価値を損ねるだけでなく、同時にドルの強みが一段と増すことでポンド/円の下値余地が広がる可能性もあるという点は見逃せない。

それは一つに、ここにきて米10年債の利回りがジワリ強含みで推移しはじめたことによる。今回のクリスマス休暇入り前には、一時1.93%程度まで上昇する場面があり、その時点で米2年債との利回り差（＝スプレッド）も大きく開くこととなった。いわゆる「イールド・カーブのステープ化」が見られ始めているわけであり、いずれインフレ率の上昇期待を伴って米10年債利回りが節目の2%を超えてくるタイミングを迎える可能性もあると見られる。

言うまでもなく、米金利の上昇傾向が強まればドルは買われやすくなるだろう。一方、金利上昇を理由に米株が一旦売られる場面があったとしても、それは一時的なものに留まると見る。債券市場から逃げ出した資金は、いずれ株式市場に向かうと考えるからである。



なお、テクニカル的には当面、ドル/円の一目均衡表の月足「雲」に注目しておきたい。左図に見るとおり、ドル/円の月足「雲」には年明け1月、2月あたりに『ねじれ』が生じる。

前回のねじれは、2015年6月に125.85円の高値をつけに行く過程のなかで生じた。

そして、その後は長らく三角保ち合い（トライアングル）を形成し続けてきた。

よって、次のねじれは「保ち合い状態からの脱出」を意味する可能性が高い。実際、このトライアングルは既に相当煮詰まっており、そろそろ上放れる可能性がある。つまり、奇しくもそのタイミングは月足「雲」にねじれが生じるタイミングということになる可能性がある。大いに注目しておきたい。

(12月26日 09:35)